

北の譜

聞き手 奥津義弘記者(北海道新聞社)

①<三つの誕生日>

本当は五月三十一日

よけいなことになると思うんですが、私の本籍は鳥取なんです。そこで伊福部っていうのは六十六代続いておりました。父(利三)が六十六代目ですけども、明治になって家が焼けたりして、カオを保てなくなったというので、父は北海道に、叔父にあたる人はパラオ島の灯台守になったんです。

まあ、そんなわけで北海道へ来まして、私は大正三年(一九一四年)釧路の幣舞で生まれました。当時父は、釧路の警察署長をやっておりました。戸籍では生まれたのは三月五日なんですけど、ほんとは五月三十一日です。

私は六番目の子なもんですから、父がある時飲んでる席で、「今度生まれたのを養子にやる」と、約束したらいいんですね。相手というのは、あの啄木の恋人の芸者さんで、そのころ近江屋とかいう旅館をやっていたらしい。その話はその場限りだったのですが、その後も人にやるつもりだったのか、届けを遅らせていたんですね。

小学校入学で届け出

役場に届け出たのは網走に移って、その小学校に入る時です。姉が三人、兄が二人もいたから、門前の小僧で、字もまあまあ読めるし、足し算も出来た。父が年をとってたもんですから、一年も早くということで、途中の九月から入れたんですね。その時に、三月五日の早生まれということにして…。でも何年も届け出なかったことで罰金取られたそうですよ。十五銭だか一元五十銭だか。



▲伊福部昭先生の生家跡。当時警察署長官舎がここにあった。

現在は幣舞公園となっている。

そのほかに三月七日という誕生日もございます。これはだいぶ後になりますが、私の曲をポストンでやることになった。その時、私の生年月日を、友人の、今は音楽評論家となっている三浦淳史君が「三月五日はどうせつくった誕生日。それならモーリス・ラベルと同じ三月七日にしまえ」と、勝手に生まれた日を替えて向こうに出してしまったんです。

そのころ私は、ラベルの音楽というのをひじょうに気に入ってたものですからそうしたんですが、それで向こうの音楽家辞典には、私の生まれた日が三月七日になっているのがあります。

母がへその緒を保存

四年ほど前、北海道へ行って母(キク※ママ→正しくはキワ)が一番大事にしていたものを調べてみると、きょうだいの中で、私のへその緒だけがしまっていました。これにはちゃんと、五月三十一日の午後六時何分か生まれた日時が書いてありました。今では誕生日を祝う時はこの日にやっております。

小学校の方は二年生の時に、網走から札幌に移り、西創成小、大通小に通った後、三年生の夏休みに十勝の音更に移ります。

音更では自意識がやっと出来て、何というんでしょう、人生の開眼というとおかしいけど、世の中をそれなりに見れるようになったところで、強い印象が残っています。

音更には帯広から乗合馬車で行きました。途中、アイヌの子弟だけが学ぶ開進学校というのがありました。子どもたち全員がはだしで、筒っぽの着物をきて、馬車に乗っているこちらを珍しいものだから見る。こっちも少年だから首を出す。これはちょっと違うところに来たな、と感じました。今は自動車で、じき行けるそうですが、僕の印象としてはうんと奥地に入ったという気がしましたね。

夜になると、ブッポウソウという鳥が、アイヌ語ではトキトーといってますが、とにかく薄気味の悪い鳥が庭の前で鳴くんですよね。もう恐ろしくて。

昭和 60 年 3 月 28 日(木)夕刊

木曜ぷらざ